

## 幼稚園からの見なおしを

永野重史

直接にたしかめたことはないのだが、スキナーというアメリカの心理学者が、つぎのような趣旨のことを言っているそうである。

どのような立派な彫塑であっても、作者がそれを製作する過程を映画にとつて、あとから、フィルムのひとつまひとつまを調べてみると、ひとにぎりの粘土をべたんと張りつけたり、へらでわずかな動作の積み重ねの結果、最後に立派な作品ができあがるのがわかる。立派な彫塑がいちどにできあがるわけではない

のだ。

ここで、スキナーは話を教育のことに移す。教育によって人間をつくりあげる場合にも、同じように、少しずつつくりあげることをしなければならぬ。何かができる人間をいちどにつくりあげてしまおうとするから失敗するのだ。少しずつ変えてゆけばうまくゆくのだ。

このように考えて、スキナーは、例のプログラム学習を開発するわけだが、プログラム学習など知らない人でも、右のような考え方に賛成する人は少なくないのではないだろうか。

別のたとえで言うならば、学力の、れんが積みである。基礎学力れんがからはじめて、順に学力れんがを積みあげようというのである。

こういう見方をする人は、学力れんがをどのくらいの高さに積みあげたかという角度からしか教育を見ようとしぬい。

幼稚園教育にも、基礎学力のれんが積みしか期待しない。なにしろ、早くから学力れんがを積みはじめるところに幼児教育のよさがあると考えるだけなのだから。こういう教育観に欠けているのは、子どもがおのずから育つという事実についての認識であり、子どもの自発的な学習意欲についての配慮である。

授業についてゆけない子どもがいると、理解できないことをいねいに教えてやりさえすればよいと考えて、彼が学習意欲を失っていることを考慮しようとする

はしない。テストの成績だけが頭にあって、子どもの心を忘れているのである。

ところで、ここ十年ぐらゐの間に、一部の心理学者によって学習意欲の研究がおこなわれてきたが、彼らに言わせると、学習到達度だけを考えた教育は、どうしてもうまくはゆかないだろうという。と言うのは、いくら教師が努力したとしても、教育の結果（学業成績）ばかり重視しているかぎりは、人にくらべて成績のよくない者は挫折感を抱かざるを得ない。挫折が繰り返されれば、学ぼうという意欲はいつかは無くなる。教師のどのような工夫も受けつけなくなるのである。

では、どのようにすればよいのか。教育の結果よりも、学ぶ過程を重視するように頭を切りかえなければならぬ。へたでもよい。歌っていることを大

切にする。誤字があってもよい。ものを書いたということを大切にす。そのようにして、学力の平等よりは、学習意欲の平等が実現するようにする。学習意欲さえ残っていれば、いつかは学ぶはずである。

また、彼らは、その場かぎりの、当座の学習意欲と、長続きする学習意欲を区別する。「よくできたらほうびをあげよう」というような約束は、当座の学習意欲をたかめるのには役立つが、自発的な興味を失わせてしまう。ほうびをやるという約束によって、万事が頼まれ仕事になってしまふのである。

頼まれ仕事として勉強している中学生たちが、自分でものごとを解決しようとするよりは、自分の生活を支配しているかのように感じられるおとなたちに対して攻撃的になる例は、近頃の新聞に毎日

のっている。また、頼まれ仕事としての勉強をなんとかやりこなした生徒が、大学入試に合格したあと、どのくらい勉強の意欲を失っているか。日本の大学生の不勉強は、世界的に有名なようである。

学力ではなしに学習意欲に焦点をあてて教育を見直してみると、こういうことになるのだが、こうしてみると、とくに新しい主張はないようにも思われる。子どもの生活、子どもの遊びを何よりも重んじた、幼稚園教育の先輩たちの頭にあつたことを今様に言い直してみただけのようない気もするのだが、いずれにしても、小・中・高の教育、何とかならないものだろうか。幼稚園教育の独自性など言っていないで、むしろ、幼稚園教育者から、小学校から先の教育についての積極的な提言をしてもよいのではないだろうか。

（国立教育研究所）